毎日新聞　第三種郵便物認可

ピープルの地平へ

世界の市場化に抗して　16

文化

生きる権利を闘い取る

ブラジルの「土地なし農民運動」

渡田　正弘

ブラジルのアマゾン熱帯雨林は生物多様性に富み、〝地球の肺〟と呼ばれる。しかし、一九七〇年代以降、ブラジル政府は自然環境保全よりも農畜産物の輸出による経済成長を優先し、牧場や農地を拡大するための熱帯雨林の大規模な伐採を容認してきた。その結果、森で暮らす先住民族は生活の場を急速に失った。

またブラジルでは、ポルトガルによる植民地時代からの大土地所有制がいまだに残り、一部の富裕層が土地や自然資源を独占している。大土地所有者の横暴によって土地を強引に取り上げられた小農民や農業労働者は都市圏に大量流入し、「ファベーラ」（スラム地区）で生活する貧困層が増大した。

歴代政府は、一九六四年に土地法を制定し、七一年には国立植民農地改革院を設置するなど、貧しい人たちへの土地の再配分を繰り返し約束してきた。だが、大土地所有者の妨害などにより、その約束はなかなか果たされなかった。

そうした社会状況下で生まれたのが「土地なし農民運動（MST）」と呼ばれる、土地を持たない農業労働者による土地獲得運動である。軍事独裁政権下の七〇年代末、聖職者や労働組合の協力を得てブラジル南部で始まり、八四年には全国組織のMSTが発足した。

進まない農地改革に業を煮やした人びとが、団結して立ち上がったのである。

MSTの運動は、まずは土地占拠から始まる。耕作されていない公有地や私有地を、土地を持たない農民や農業労働者が占拠し、所有権が認められるまでの二、三年間、簡素なテントで共同生活をする。次の段階では、獲得した居住地で四十家族ほどが、協同組合による農業に取り組む。大土地所有者が雇った私兵の暴力などによって犠牲者を出しながらも、運動は全国に拡大してきた。

土地占拠という方法は、確かに荒っぽい。だがそれは、政府に約束を守らせるための正当な行動なのである。

現在、MSTは国内二十七州のうち二十三州で組織され、約百六十万人の土地を持たない農民、農業労働者、失業者らが参加している。その多くは、戻る土地も家もなく、生きる最後の望みをMSTに託している人びとだ。これまでに約三十五万家族が占拠によって土地を獲得、現在も約十八万家族が土地獲得を目指してテント生活をしている。

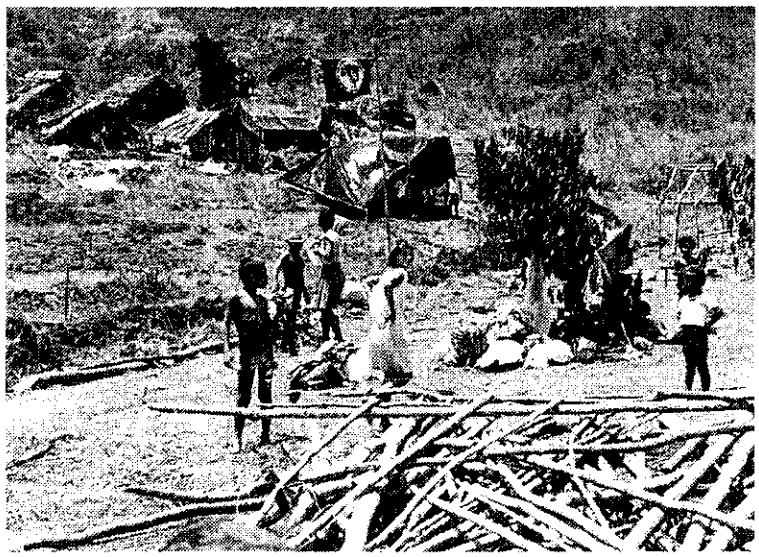
二〇〇五年一月、ブラジル最南部のポルトアレグレから南西へ車で二時間ほどのところにある「ジュンコ湖居住地」を訪ねた。入り口から続く道路の両側には、稲穂が六、七分出た水田が延々と広がる。パンパと呼ばれる大平原の一角にあるこの居住地には、三十五家族百七十人が協同組合をつくって生活している。

農場は総面積八百七㌶。一家族の農地は最低十七㌶である。主な作物は一毛作の米で、水は湖からポンプで引いている。収穫した米はパック詰めしてポルトアレグレへ出荷する。カボチャなどの野菜は基本的に自家消費用で、家畜の糞（ふん）を堆肥（たいひ）に使う有機農法を進めている。

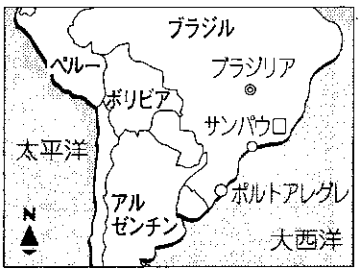
「小作人だった時は、収穫の五割を小作料として地主に取られていた。だが今は自分たちが主人。何事もみんなで決めて生産できる」と、協同組合の組合長、アメリコ・ダ・ルースさんは語った。組合の運営は、全員参加・男女平等の共同作業が基本で、子どもの教育と保健衛生にも力を入れている。

MSTは今日、単なる土地の占拠・獲得運動にとどまらず、貧困を生む社会の変革を目指す社会運動に発展している。ブラジル国内の社会運動団体だけでなく、グローバリゼーションに対抗する農民運動の国際的な連合組織「ビア・カンペシーノ（農民の道）」と強いつながりを持ち、また、オルタナティブ（代案）を模索する場として二〇〇一年から開催されている「世界社会フォーラム」の運営でも主要な役割を担っている。

もちろん、万事が順調ではない。離脱者が出たり、労働者党の現ルーラ政権の下でも農地改革に大きな進展が期待できず、苦難は続いている。しかし、これまで犠牲を強いられるだけだった人びとが団結して、人間としての権利を獲得し、新しい人生を生きられることを実証したMSTの運動は、中南米はもとより、グローバリゼーションの抑圧と闘う世界の農民に希望を与え続けている。



占拠した土地に立ち並ぶ小屋。その手前（中央）にMST（土地なし農民運動）の旗が掲げられている



【わたりだ・まさひろ】NGO「グローバリゼーションを問う広島ネットワーク」事務局長。1951年、広島県生まれ。米国のNGO「Food First」のインターン（実習生）、「市民フォーラム2001」の専従スタッフなど経て現職。